

分類研究分科会（2004 年度活動報告）

代 表 者：藤倉 恵一（文教大学）

会 員 数：4 機関 4 名（2005 年 3 月 11 日現在）

会 員：正会員

伊藤 民雄（実践女子大学） 鈴木 学（日本女子大学）

藤倉 恵一（文教大学） 山本 有里（学習院大学）

延べ出席者数：41 名（内訳：月例会 10 回・夏期集中研究）

1．活動の概要

1）基本テーマ

件名、シソーラス、Indexing 理論等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究を基本テーマとする。

基本テーマを念頭に、「日本十進分類法（NDC）」、「Dewey Decimal Classification（DDC）」、「Bliss Bibliographic Classification 2nd Edition（BC2）」という三つの分類法についてその性能の比較検討を行う。具体的には教育分野について取り上げる。

2）活動概要

上の基本テーマは本来、前期（2002 - 2003 年度会期）のものであった。が、BC2 の内容理解に多くの時間を費やしたことや、DDC22 版への改訂が会期中にあったことなどの理由により、DDC を分類法比較研究対象から外していた。そこで今期は前期テーマの延長として、DDC に対する理解を深めることを目標としてまず掲げた。

近年の DDC は特定分野における分類記号の再配置・体系整理を改訂のたびに行っており、20 版（1989 年）と 21 版（1996 年）の間には、教育分野の大改訂が行われている。改訂の過程では当然当該分野をとりまく社会的事情、学際的な動向の変化などが考慮されているが、同時に、必要な箇所にファセット分析の手法を取り入れてより詳細な分類が可能になるような改訂を行っている（21 版における生命科学など）。

そこで、改訂前の 20 版、改訂後の 21 版、そして最新の 22 版をそれぞれ比較検証し、従来の列举型分類法を改編するにあたり、どのような観点が作用していたかを分析する。また、ファセット分類の手法を導入することでどのような影響が出るかを研究・検討することを目指している。

また、今期の参加者に 13 版（1932 年）の所蔵機関があったことも幸いしている。戦前の DDC のその姿は、明らかに現在の NDC に影響を与えているように思われる。NDC は現在の 9 版に至る過程で、DDC のような大規模な改訂を経験したことがない。DDC13 版と近代の諸版との比較は、NDC との比較に通じるものと推測される（2005 年 3 月現在では、諸版の翻訳と比較を始めた段階である）。

なお、DDC の検証を終えた後は前期・今期の成果を踏まえ、列举型分類法にファセット分析を導入しつつある現在の DDC と、厳密なファセット分析のもとに成り立っている BC2 の例を参考として、NDC 9 版へのファセット手法導入を実験し、それがもたらす影響・効果を研究テーマとすることを検討している。

実際の研究活動は、2 年間という活動期間を、

第一期：トータルな意味での現代図書館分類法理論に関する最近の論考のレビュー等を通じて参加者全員の理論的な基礎レベルを整える

第二期：NDC、DDC、BC の三つの分類法についてそれぞれの基本的な考え方をとらえた後、最新の版において特に教育分野の各分類法での扱い方を比較検討すると共に、その体系・構造・考え方等について詳細に討議する

第三期：2年間の総まとめを行うという大きく三つの期間に分けて研究を行う。
という3つの期間に分けて研究を進めている。

第一期の活動

今期の参加者は少数で、かつ経験の差が顕著であるため、比較的平易でかつ熟練者にも再読の価値があると判断した以下の文献を採り上げた。

主題情報へのアプローチ：丸山昭二郎編（講座図書館の理論と実際（第4巻））
東京：雄山閣出版，1990.7 267p；21cm
（ただし4章・7章を除く）

また、夏期集中研究の課題としては、近年刊行された雑誌の中で最も分科会の趣旨に即した特集が組まれた以下の号より4文献を採り上げた。

情報の科学と技術 53（6）2003 特集＝ドキュメンテーションの現在
原田 勝「ドキュメンテーションの現在」
光富健一「UDCに関わる諸問題」
山崎久道「ドキュメンテーションにおける情報検索を考える」
小林康隆「ネットワーク情報資源と分類」

第二期の活動

第一期の延長および第二期実務への足がかりとして、まずDDCが日本でどのように紹介され、同時にNDCや日本における主題分析にどのように影響を与えたかを知る手がかりとなるであろう以下の文献を採り上げた。DDC12版 Introductionの邦訳であり、初版は1930年である。

Dewey 十進分類法導言 / Dewey〔著〕；間宮不二雄訳 復刻版。
武蔵野：不二会，1982.6 111p；21cm

上の文献の輪読を終えた後、前述したDDC諸版（20、21、22版および13版）の翻訳作業に入った（2005年3月現在継続中）。

3）TP&Dフォーラム（整理技術・情報管理等研究集会）の共催

1991年に日本図書館研究会整理技術研究グループが中心となって発起したこのフォーラムの共催も分類研究分科会の重要な役割である（現在の主催は同フォーラム実行委員会であり、分科会会員も実行委員に参加している）。

このフォーラムは全国各地の整理技術・情報管理（知識組織化、情報検索）等に問題意識を持つ研究者・実務者の研究・交流の場であり、研究発表に対する議論を通じて発表内容へのさらなる興味を深めていくという機会である。

今年度は2004年9月11日（土）～12日（日）に文京区本郷の鳳明館本館にて第14回となるTP&Dフォーラム2004が開催され、前期分科会会員が前期の研究成果をもとに以下の発表を行った（敬称略）。

「BC2（Bliss Bibliographic Classification 2nd ed）分類を付与する試み」

発表者：萬谷衣加（獨協大学図書館）

司会者：藤倉恵一（文教大学越谷図書館）

内容は「TP&Dフォーラムシリーズ：整理技術・情報管理等研究論集」に論文として収録予定。

2．刊行物その他

分類研究分科会は 1955 年（昭和 30 年）12 月 7 日に発足した最も歴史の長い分科会であり、今期設立から 50 周年を迎える。そこで東地区部会研究部の協力を得て記念事業を計画している。

2004 年 11 月 13 日（土）には設立 50 周年記念事業の第一弾として、記念シンポジウム「分類に明日はあるか」および祝賀会を日本女子大学・桜楓館（文京区目白台）にて開催した。主な内容は以下のとおり（敬称略）。

基調講演「分類の将来を考える」

藤田節子（川村学園女子大学教育学部助教授）

シンポジウム「分類に明日はあるか」

パネリスト（五十音順）

石川徹也（筑波大学図書館情報メディア研究科教授）

金中利和（日本図書館協会分類委員長・元日本大学教授）

田中 功（日本女子大学文学部教授）

藤田節子（川村学園女子大学教育学部助教授）

萬谷衣加（獨協大学図書館・元分類研究分科会会員）

司 会

山崎久道（中央大学文学部教授）

なお、他の記念事業はシンポジウム記録の出版を含め企画・検討中である。

これに関連し、2004 年 11 月 12 日（金）に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された 2004 年度研究会（交流会）において、藤倉恵一（文教大学）と鈴木学（日本女子大学）が分類研究分科会創立 50 周年記念報告を行った。

文責：藤倉恵一（分類研究分科会代表）